

【大会報告】

第44回日本基礎老化学会大会が残すもの ～基礎老化研究と学術集會を再考した集い～

丸山 光生

国立長寿医療研究センター研究所
ジェロサイエンス研究センター長

2021年、例年より一ヶ月も早く5月半ばに梅雨入りした東海地方の6月12日から2日間、愛知県あいち健康プラザで日本基礎老化学会としては初の試みとなる現地とオンラインでの完全ハイブリッド開催として第44回日本基礎老化学会大会が第32回日本老年学会総会との合同開催として開かれました。合同開催の準備は通常2年前ですから、2019年6月に杜の都、仙台で開かれた第31回日本老年学会総会の中でその計画が始まりました。2017年に名古屋の第30回日本老年学会総会時にも下川理事長(当時)のご意向もあって、第40回を数える記念すべき基礎老化大会のお世話をさせて頂いた思い出と達成感でキックオフ会の当日は、もちろん、誰もCovid-19禍が世界中の人々を苦しめる事になるなど想像だにせず、私は再び同じ名古屋で前回以上の大会を成功させねばという経験だけでは乗り越えられない壁を感じていたことを記憶しています。その後、Covid-19禍との感染拡大防止対策、大会が開かれる頃にはこの新型コロナウイルスと共生する、あるいはポストコロナを目指す新しい生活様式での開催を検討する声が一段と高まり、予定されていた学術集會や世間で行われる数々のイベント、そして東京五輪まで1年延期される中、合同会を構成する各分科会の開催形式が真剣に議論され始めました。2021年を迎える頃には他の5学会が、オンライン形式での開催で話が進み中、会員数として器の小さな基礎老化学会だけが対面、現地での大会に拘った形で全てのプログラムについて、オンデマンド形式を採用せず、質疑応答が双方向で可能な同時配信でのハイブリッド開催を決定しました。

準備を進める上で、素晴らしいWeb配信業者と一緒に仕事ができることになったことはこの決定を勇気づけてはくれましたが、当初開催会場としていた国立長寿医療研究センター内の教育研修棟が年度末が近づく頃、新型コロナウイルスワクチンの接種会場になる予定だということで、開催場所を2014年第37回大会で使わせて頂いた健康プラザに急遽、変更になったこと、さらには開催準備

連絡先：丸山 光生
〒474-8511 愛知県大府市森岡町7-430
国立長寿医療研究センター
TEL：0562-46-2311
E-mail：michan@ncgg.go.jp



「第44回日本基礎老化学会大会」の開催案内ポスター

がピークに迫る5月、首都圏に加えて愛知県も第3波の感染拡大で緊急事態宣言の発出下での開催を余儀なくされたことなど、次々に起こる不測の事態に、果たして無事に開催まで持ち込めるのかという不安が募る日々でした。

事前参加登録を進めていく中で、47題の一般演題の中で対面発表する参加者は愛知県からの参加者のみであっても、議論の質を落とさないように質疑がスムーズにできるように細心の注意を払い当日を迎えました。大会のプログラムを中心とした発表の内容については見聞録の稿で補って頂くとして、結果的には、5セッションに跨



会場となったあいち健康プラザホール入り口風景



国際シンポジウム A のメンバー一同（対面参加の視点から）

がる一般演題、ランチョンセミナーを含めた3つの企業共催セミナーを2日間、のべ3会場で開くことができ、当日現地参加された方は一日目が31名、2日目が27名でしたが、オンラインで同時参加頂いた会員の皆さまは3会場でそれぞれ、125名、104名、77名と当日の会場の大きさでは「密」になる皆さんにご参加頂いたことは今大会を振り返って、最も胸をなで下ろしたことでした。この原稿を執筆している時点では他の分科会から老年学会経由で視聴されている皆さんの数は把握できていないのですが、こうした数字はCovid-19禍でオンライン開催が主流となった今後の学術集会のあり方に一石を投じることができる事例になったのではないかと考えています。

今大会のシンポジウム企画として、全員オンラインでのご登壇ではありましたが、老化研究との接点を持ちつつ、それぞれの分野で世界レベルの活躍をされている国内外の8人の先生をお迎えして、初日は午後の遅い時間に欧州と日本の先生が、翌日は午前の早い時間に米国、豪州を含めた日本の先生とリアルタイムで世界を結んで開くことができました。



国際シンポジウム B のメンバー一同（Web 参加の視点から）

今から7年前に第37回大会のお世話をさせて頂いて以来、名古屋で開かれた大会長はこれで3度目になります。その間に昨年11月には健康長寿を行政挙げて意識の高い松本で一部 You Tube によるオンライン配信を含めた第1回市民フォーラムも開催する機会を得たことで、今回の新型コロナウイルス感染拡大防止対策を施すのに良い経験を積むことができました。しかし、学会の原点とも言える学術集会をお世話するというので、その都度テーマを考える以上に開催する大会の内容、参加意義については随分と時間を掛けてきましたが、今回それらを思い出して自分なりの趣旨というか「らしさ」は出せたかと個人的には感じています。学術集会であれば



ハイブリッド形式での若手奨励賞の授賞式

こそ、所属する会員の年に1回の研究発表の場である事は最も大事な事で、その一つ一つをコメントできる会員が直接、議論する。特に若い研究員、新規の会員の研究テーマを応援する、また若手奨励賞を始め勇気づけることで、基礎老化研究を発展させることにも貢献する。こうした想いはこれまでの全ての大会をお世話をされてきた先生方と同じように伝承した上で、自分としては基礎老化研究に是非とも取り込みたい最前線の研究に触れる機会を作り続けたいという意識で毎回、海外からの演者を積極的に招いて、直にトップレベルの研究を議論できたという点では一定の役目を果たせたかと考えています。とりわけ今大会では多くの研究者が海外の学術集会等に出席して、直に質疑応答できる機会が制限されていたので、オンラインで参加された視聴者もリアルタイムでシンポジストに質疑できる機会を提供できたことはこれまでにない経験でした。

今後、新型コロナウイルスと共生する、あるいはポストコロナを見据えた学術集会のあり方に現場でより多くの情報を吸収したいという会員に加えて、今回の様な経験を活かしたオンライン参加の選択肢を増やすことで、この大会が残せたメリット、デメリットを叩き台にして今後の基礎老化学会が開くシンポジウムや年会等の学術集会がさらに活性化され、積極的に世話人になろうと考える会員が増えることを願うばかりです。



第44回大会のお手伝いをしてくれたスタッフの皆さん

最後にあらためて我々を温かく迎えて頂いた地元愛知の会員の皆さん、お手伝いいただいた国立長寿医療研究センターの関係者に心から感謝します。